

通信



5月の鬼越池から望む逆さ岩手山(撮影:清代 正晴さん)

目 次

●表紙写真		1 P
●小さくても光り輝く地域からの発信		2～5 P
「世代と世代を繋ぐ活動から地域を盛り上げる」	小井田 寛周 さん	
●県央ブロックごみ処理広域化計画の撤回を求める前潟・太田地区の活動状況について		
「ごみ処理広域化計画の撤回を求める太田の会」世話人代表	黒澤 誠	5～6 P
●2040問題とは その2 岩手地域総合研究所事務局長	小松 勝治 さん	6～7 P
●「地名の話 11」	高橋 宏寿 さん	7～8 P
●植物の話	清代 正晴 さん	8 P

NPO法人
岩手地域総合研究所

岩手県盛岡市中央通二丁目8番21号 Mホール
Tel・Fax:019-624-6715
メール:i-chiikisouken@salsa.ocn.ne.jp

小さくても光り輝く地域からの発信



小井田 寛周 ひろしち さん
小井田立体農業研究所
オドデ塾事務局長

世代と世代を繋ぐ活動から

地域を盛り上げる

私は九戸村在住の小井田寛周です。生まれも育ちも九戸村。昭和61年生まれの32歳



です。現在は、父、母と家族3人で農業を営んでいます。今回は我が家の農業のこと。そして、私自身のことや地域との関わり方や考えなどをご紹介します。できればなどと考えています。

・おらほの「立体農業」

九戸村は岩手県と青森県の県境に近く、面積のほとんどが山林の中山間地の村です。我が家はそこで「立体農業」という農法を実践しています。立体農業とは、中山間地の限られた土地に果樹、家畜を有機的に取り入れ、空間を立体的に利用した山村農業のことです。今でいうところの循環型農業といえましょう。



いかもしれません。

現在の我が家の立体農業は、「手打ちくるみ」を植えた農園に、「乳牛」「鶏」を放牧したスタイルです。くるみの樹の下に、牛を放牧することで、牛が草を食べ

てくれる為、人が草取りをしなくてもよくなります。さらに牛がそのまま樹の下で糞をすることで、それがそのまま肥料となり、改めて堆肥も大量に投入する必要がなくなります。また、くるみの害虫は幼虫状態では土の中にいます。鶏を放牧することによって、鶏が土の中を掘り起こしながら虫を食べ、害虫駆除の役割を担ってくれます。これによりくるみの樹からは「クルミの実」。乳牛からは「牛乳」。鶏からは「鶏卵」

をそれぞれストレスなく、また農業や化学肥料になるべく頼らないこだわりの生産物を生産することができています。動物たちの本来の特性を農園内でうまく掛け合わせ、人がなるべく手をかけず、循環された環境で農産物を生産する形です。

我が家の農園は「小井田立体農業研究所」と名前を付け営業しています。研究所と言っても、会社でもありませんし、研究機関というわけでもありません。ただ、まだまだ確立されていない立体農業という農法を研究していくという気概で、農場の創始者の祖父が名づけました。

そもそも立体農業とは、昭和初期、協同組合の父と呼ばれる「賀川豊彦」が日本の山間地でも農産物を効率的に生産し、貧しい農民の暮らしを豊かにすることを目的に提唱された農法です。具体的には、農園の中で果樹を栽培し、その木の下に家畜を放牧。農園内で循環した環境を作ることによって、山間地でも果樹からの農産物、家畜からの副産物を生産できるようにするというものです。特徴的なのは人間がそれまで行ってきた作業を、家畜の力を借りて、生産できるようにするという点です。

立体農業は、雑誌「家の光」で連載された賀川豊彦の小説「乳と蜜の流るる郷」で全国的に知られるようになりました。私の祖父八郎

も、戦前この小説を読み、立体農業の存在を知り、いつか実践してみたいと思うようになり、祖父は戦時中徴兵され、小笠原諸島へ赴任した経験がありました。その際、当時の小笠原諸島ではヤシの木などの木の下にヤギなどの家畜を放牧した農業を営んでいました。それを見た祖父は初めて立体農業の具体的なイメージができ、より立体農業へ対する思いを強くしたとのことです。

終戦後、地元へ帰ってきた祖父は、九戸村で藩政時代から受け継がれてきた「手打ちくるみ」を起点とする果樹にすることに決め、先祖より耕していた畑にクルミの木を植えることにしました。手打ちくるみは、全国的によくみられる鬼ぐるみとは別な品種で、江戸時代、朝鮮半島から渡ってきたものです。殻が柔らかく身が取り出しやすいのが特徴で、九戸村とわりわけ現在の江刺家地区は適地であり親しまれてきた果樹です。しかし、祖父の父、私から見ると曾祖父に大反対を受けました。手打ちくるみはそれまで果樹的に栽培されていたというよりは、畑の脇や、家の庭先に植えられた冬の非常食として家々で植えられているだけに過ぎず、農産物として栽培されていたのではないに等しい状態でした。それでも、祖父は手打ちくるみに将来性を感じ、父からの反対を押し切り、くるみの木を畑1.5ヘクタールに



植樹しました。その後、昭和30年に当時全村的に導入する農家が増加していた乳牛(ホルスタイン)を導入。これを立体農業における家畜の基盤にしました。さらに昭和37年、農場に隣接する山林を開拓し、1.2ヘクタールにくるみを植え増園。

昭和40年には、農場に牧草も植え、本格的に農場内で牛の放牧を開始しました。その後、昭和52年にくるみの害虫駆除の目的で鶏も導入し、現在の形となりました。

我が家の生産物の中でも、手打ちくるみは個別に販売し全国に出荷しています。決して安い値段ではありませんが、毎年沢山の方に買い求めいただいている人気の品です。鶏卵も地元の産直施設を中心に、こだわりの自然卵として、販売しています。残念ながら牛乳に関しては、個別に販売することが食品衛生法などの兼ね合いでハードルが高く、農協出荷にとどまっています。農作業ですが、こだわりの我が家の産品をなるべく多くの方に手に取ってもらい食べてもらい、我が家のことを知ってファンを一人でも多くすることが今後の目標です。

・地域の為は自分の為

私自身は、今から4年前、28歳の時に本格的に就農しました。またそれより2年前26歳で地元へ帰ってきたUターンな人間です。それ以前は、大学卒業後、東北で展開するホームセンターで働いていました。現在は農業の傍ら、地域活動にも自分なりにではありますが積極的に参加しています。

参加している主な活動は、消防団、村内地区対抗スポーツ大会、オドデ塾という町おこしボランティア団体、地元神楽の郷土芸能など多岐にわたります。

消防団は地元へ帰ってきてから一番最初に参加した活動になります。地域の防災の要であると同時に、特に春、4月から5月までが行事が集中する時期です。もちろん火事、水害などの出動がかかれば仕事を放りだして、現場に直行するのが主である活動です。消防団に参加して6年ほどたちましたが、近年では水害による出動が増えてきました。元来九戸村は降水量が少なく、水害はめったに起きない地域です。にもかかわらず、出動が増えているという事は地球温暖化による異常気象が災害を高頻度で起こしていると感じます。しかし活動の中で、地域の縦の関係ができるというのは心強いと感じる活動です。

村内地区対抗スポーツ大会とは、通称6ブロックと呼ばれ、九戸村を6地区に分け、野球、バレーボール、ゲートボール、卓球、綱引き、駅伝の種目で地区の住民とスポーツで交流、競技を行うものです。どの種目も本番数週間前から練習、準備を行い本番に臨みます。正直なところ私は昔から運動音痴で、戦力にはほとんどならないのですが、駅伝、綱引きは事務局として、微力ながらお手伝いをさせてもらっています。運動ができる人だけではなく、それを支える役割もあるため、地元の同世代の方との交流の場となっています。

「オドデ塾」とは九戸村の自分の住む江刺家地区を盛り上げるための町おこしのボランティア団体です。活動は世代と世代を繋ぐ架け橋になることを理念に、約25年前私の父たちの世代が始めました。それまであった青年会活動が下火になり、地域に元気がなくなってきたのに危機感を感じ、発足させました。現在は九戸村の20代〜30代の青年を中心に活動しており、主に夏のお盆に地元の道の駅で開催する「盆踊り大会」。昔ながらの演芸会の伝統を残し、地域の芸能の発表の場として冬には「演芸まつり」を開催しています。各お祭りは、地元の方、青年の協力によって成り立っています。私は現在、そこで事務局長をやらせてもらっておりますが、独断に走らず、塾生

の意見を聞き、話し合いながらの意思決定をするよう心がけながら、活動させてもらっています。ありがたいことにそれぞれの活動では、地元ではおなじみのお祭りとして認めてもらえるようになり、続けることは困難なことも多いですが、現在まで続けることができます。

このほかにも細かい活動があり、仕事を含め年間を通じて正直忙しいというのが本音です。ですがどの活動でも、仕事、友人だけの交友関係では育めない、幅広い横のつながり、そして縦のつながりを形成できるいい機会になっています。

とはいえ、大学卒業後すぐホームセンターで勤務していた時代にこのような生活になるとは思ってもみませんでした。

私自身、以前は何も考えずとりあえず今生きていればいい。将来のことはほとんど考えない生活を送っていました。高校は地元の普通科の高校に通いましたが、特にやりたいことも見つからず、幅広く応用できるということで、大学では経済部に進学しました。しかし、在学中も希望の職種が見つかったわけでもなく、とりあえずホームセンターが好きだったという理由でホームセンターに就職しました。就職後2年間は地元から近い青森県の店舗に勤務しましたが、2011年3月1日に岩手

県釜石市の店舗に転勤になりました。

その10日後の3月11日に東日本大震災が発生し、釜石にて被災しました。これが私にとって決定的な転機となりました。職場である店舗は津波の被害はなかったものの、逆に店舗が無事だったため、被災地のホームセンターというところで、生活用品を求めた被災者の方が押し寄せ、怒涛の仕事の日々となりました。ただこれも被災地支援の形だと思い大変でしたが約2年間働きました。同時に私自身、地震で被災したことが人生を考え直す大きなきっかけになりました。この会社で働いている以上、勤続中はずっと転勤が付きまとい、住む場所も自分で選ぶことができない生き方をおかしい、住む場所は自分で決めた生き方をしたい。そう思ったとき、自分は生まれ育った地元で生活していこうと決心し、2013年に退職し、九戸村へ帰ってきました。

そういった経緯の為か、私は帰郷後、長い目で見たとき、自分にプラスになることはしっかりやろうという気持ちでいました。その一つとして、地域でのボランティア活動はできる限り参加しようと考えました。それまで実家を出てからは帰省しても地域の活動には関わってきませんでしたし、気軽に話せる人間も友人以外ではほとんどいませんでした。ですがいざここで生活すると決めた以上、地域

の方とのつながり、そして信頼が何より重要になってくる。何かあった時には、地域の人に助けてもらえるし、自分も頼りにされる存在になる。

そのためには、地域活動にいかに関わっているかで地域の方々の自分に対する評価が決まってくる。だからこそ面倒くさがらず、できる限りは頑張ることを旨にしています。

地域活動はとりわけボランティア活動です。一見ただただ無駄な働き、大変なだけというように見えることも多いのではないのでしょうか。実際地域の同世代の間でも地域活動に協力的ではなく、行事にも出ない方が多いのが実情です。しかし、将来的には間違いなく自分にプラスになるはず。今は面倒くさいという一言で済んだとしても、将来的に自分が本当に変な時どうなるか。その時、地域で助けてくれる一員に自身がなれていけば、より安心な生活、いわば地域が自身のセーフティーネットになってくれるともいえるのではないのでしょうか。地域活動は地域の為であると同時に、自分の為でもある。まだ地域活動に積極的に向き合えていない方も、ちよつと長い目で見て考え、無理のない範囲でやってみてほしいと思います。

現状我が家の農業はまだまだ道半ばです。経済的に課題が山積しているのが実情で継続

的に営農するためにも現在のスタイルを維持しながらもつと安定した経営を目指していきます。帰郷前、私は交友関係の非常に希薄な人間でした。ですが地域活動も継続してきたおかげで、帰郷時よりも沢山の仲間や知り合い、少しずつですが人脈ができてきました。今後でもできる限り、無理なくしつかり地域とも向き合い地域と自身がWINWINになることを目指したいです。最後に、私は現在まだ独身です。やはり長い目で見たとき、人生のパートナーが必要だと思うため、そちらも頑張ってみてみたいと思います(笑)

県央ブロックごみ処理広域化計画の撤回を求める前潟・太田地区の活動状況について

「ごみ処理広域化計画の撤回を求める太田の会」
世話人代表 黒澤 誠

5月10日土淵地区活動センターで「盛岡インター付近の環境問題と町づくり振興対策協議会」(以降、振興対策協議会とする)と「ごみ処理広域化計画の撤回を求める太田の会」(以降、太田の会とする)共催による学習会「ごみ処理広域化について考えよう」を池田こみちさんを講師に開催しました。参加者は、



約80名参加しました。参加者は、前潟、土淵・太田地区だけでなく、周辺地区や盛岡広域の市町からも集まりました。また、盛岡市議や雫石町議の参加もありました。

この学習会は、候補地のことだけにとどめるのではなく、周辺地区、全市、さらには盛岡広域市町の問題として情報を伝えていく一つのきっかけとなることを目指して共催しました。以下にここまでの経過について簡単に報告します。

「県央ブロックごみ・し尿処理広域化推進協議会」(以降推進協議会とする)が進めるごみ処理広域化計画は、ダイオキシン対策として20年前につくられました。すでに小規模焼却施設でもダイオキシン対策は対応できるようにになりました。さらに盛岡市が7自治体を説得した根拠、「広域化しないと補助金が出ない」ということも県北ブロック広域化計画を進める中で、国は広域化しなくても補助金を出すことを明らかにし、県北ブロックは広域化を中止しました。すでに破綻している時代遅れのもです。

これを、盛岡市は市民に隠したまま、広域化計画を進めてきました。

処理場建設予定地の候補地を466か所選り、市用地整備検討委員会を13回開催し、半

分以上は市民に非公開で開催して4か所に絞りました。その中に、盛岡インター付近が入ったのは、市からのごみ処理場建設用地への打診に対して、上厨川土地区画整理組合としては「手を挙げない」ことを決めていたにもかかわらず、地域の住民が情報提供したからです。さらに、この処理場建設計画に、以前から地域要望として挙がっていた前潟駅設置計画や付随した諸施設誘致を描く市の町づくり構想が浮上してきました。

この町づくり構想は、3月市議会でごみ処理施設計画とは別に進めるものだという答弁を市建設部長が行っています。

こうした経過の下で、4か所に絞られた候補地では焼却場から排出される有害物質による地域環境への大きな影響が懸念されること、ごみ搬送車両の増加による住民や通学児童の安全への不安、農産物への直接の影響や風評被害、何よりも3市5町のごみを一か所に集めて処理しなければならぬのか、ごみ処理の基本である分別、資源化、リサイクル等減量が逆行すると反対運動が起きています。

また、用地選定にあたって市が行ってきた「住民説明会」の対象周辺500mから外れているとした太田地区でも今年3月20日に初めて住民説明会が開催され、市の説明では参加者の納得を得られたとは言えず、3月22日に太田の会は680筆の反対署名を市に提出しました。

結果、今年3月25日の8自治体の首長が

集まった「推進協議会」で盛岡インター付近以外の3か所は候補地に困難、盛岡インター付近を有力候補地として協議を継続することに決めました。

これは、ごみ処理問題での長年の住民運動のなかで、市用地検討委員会が付帯意見で「住民の理解、住民の合意を得る」ことを上げたこと。7自治体の首長もその立場で意見を述べたことにより最終候補地の決定をできませんでした。

「振興対策協議会」は、2年前にやはり反対の署名を309筆集めて市に提出してきました。その後、先に触れた経過から市は積極的に推進する働きかけを行ってきました。

この地域は、前潟イオンや高速道インターがあり、今でさえ交通量が多く、渋滞が激しい地域です。隣接する土淵小学校の喘息罹患率は盛岡市内平均の2倍も高くなっています。この地域にさらに、今のクリーンセンターの

倍・450トものごみを燃やし、搬入車両が500〜600台も増えたら地域の住民、子どもへの健康への不安が大きくなるのは明白です。

「振興対策協議会」と「太田の会」は、3月25日の推進協議会で最終決定を見合わせたとはいえマスコミ報道などでは、ほぼ決定という報道がされる中で、両地区と大館地区にごみ処理広域化の問題点を指摘したチラシと5月10日の学習会チラシをほぼ全世帯に配布しました。また、この間も太田の会では署名活動を継続しており、多くの方から署名して

いただいております。これらの取り組みを支えたのは、多くの支援者のおかげです。

5月10日の学習会で講師の池田こみちさんは、ごみ問題について全般的な話をされ、ごみ処理広域化は世界の流れに逆行するものであり、本来の循環型社会の形成に向かうべきであると述べました。アンケートには、講演内容とこれまでの取組みに賛同するコメントが多く寄せられました。

今後もごみ処理広域化計画を撤回させ、本来の循環型社会の実現を目指して引き続き活動をおこなっていくことが必要です。

2040問題とは その2

前回の「2040問題とは その1」では少子高齢化社会による危機について「自治体戦略2040構想研究会」が提起している問題点を述べました。この「危機」に対して「構想研究会」は第2次報告でその対応策を提起しています。

① スマート自治体への転換

職員を半数にし、AIやロボティクスの活用でスマート自治体へ転換。各自治体共通の情報システム、申請様式の標準化を進める。

②公共私によるくらしの維持

自治体は新しい公共私の協力関係づくりと支援に回る。暮らしを支える担い手として定年退職者や外国人も考えコーディネートする。

③圏域マネジメントと二層制の柔軟化

個々の市町村がフルセット(全業務)主義から脱却し、「圏域」単位での分担を進める。都道府県は「圏域」外の市町村と共同し、都道府県と市町村の二層制を柔軟化させる。

④東京圏のプラットホーム

東京圏は特に75歳以上の高齢者の増加が顕著で、近隣県との連携が必要。

以上の様な対応策が並べられていますが、これらの政策が実現されるならば、憲法で保障された自治体を無視して、「圏域」に直接財政支援をするなど、地方自治、住民自治を破壊し、国の政策を無条件で進める体制づくりが進められてしまいます。その先は財界と安倍政権が求めている「道州制」へ繋がっていくのではないのでしょうか。

この報告書は「自治体戦略」と銘打っていることから分かるように、2040年頃の自治体組織および行政のあり方に特化した内容にはなっています。第一次報告で提起した「2040問題」の少子高齢化社会の到来を無条件に受け入れ、小さな自治体は衰退するということを既成事実化してその根本問題に真正

面から向き合っていないことが最大の問題と言えると思います。

安倍政権は出生率を2020年代半ばまで1.8を目標にしていました。実際は、2016年1.44倍から2017年1.43倍と下降しています。このままではさらに低下し続けるでしょう。

原因ははっきりしています。すべての若者に安心して働く場所が確保され、家族を養うことが出来る収入が得られ、医療や子育ての心配のない社会になっていないことです。年金や介護、生活保護等の将来の安心も大切です。

安倍政権はまさにこれらの安心を奪う逆の政策を進めています。この政府の政策を転換させ、若者が希望と充実感を持ってこれからの生活を過ごしていけるような政策を進めたい限り日本の少子高齢化の克服は出来ないことは明らかです。

6月23日、立命館大学教授の平岡和久さんを講師に、「2040問題」の講演会を開催します。「2040問題」とは何か、政府の狙いはどこにあるのか、私たち市民の暮らしにどのような影響があるのか、詳しくお話しします。ぜひご参加ください。

(文責 事務局 小松勝治)

地名の話—12

高橋宏壽さん

はっけ【八卦】盛岡市中太田字八卦

八卦は岩手県に多い地名で、羽毛・八掛なども書きます。八卦は上の平地と下の平地の間の「段差」についた地名で、この地形は川が流れた跡によくできます。

昭和五七年盛岡市教育委員会が中太田八卦を発掘しました。その調査報告書に

八卦の段差は比高2mで、東西に長い自然堤防となっている



とのべています。自然堤防(河岸段丘)は河川の両側に自然にできる堤防の高まりで比高は通常1mないし数メートルにもなり、この上に集落が発達します。

八卦という地名で注目したいのは『吾妻鏡(あづまがみ)』の記事です。

文治五年(1189)八月二日、はげしく雨の降る中、平泉へ攻め込んだ源頼朝軍は、その後紫波町陣ヶ岡に帯陣し九月十一日の夕方、厨川柵に到着します。そして九月十二日の記

お知らせ(改訂版)

NPO法人岩手地域総合研究所は今年9月で設立10周年を迎えます。これを記念し、総会・講演・レセプションパーティーを行います。皆様のご参加をお願いします。

(前回の3月号に掲載した日程に変更があります)

日時：2019年6月23日(日)13:30~

場所：マリオス18階181会議室

(盛岡駅西口)

内容：

①通常総会(13:30~14:30)

②記念講演(15:00~16:30)

「自治体戦略2040構想」と

地方自治・地方財政

講師 平岡和久教授(立命館大学)

③レセプションパーティー

(17:00~18:30)

マリオス4階 濱野井

(会費4000円)



事です。河において、この南西の方角の隅、儼杖次(けんじょうじ)の波気(地名八卦)を選んで宿泊所と定められる。とありますが、厨川柵が天昌寺の辺りにあったと想定すると、南西の方角は太田付近で、波気(八卦)の地名があ

筆者略歴 昭和三五年岩手大学学芸学部卒 安代町・盛岡市・花巻市の小学校に勤務、平成九年退職する。

るところは、中太田字八卦しかありません。そこに陸奥守の護衛官の宿所の儼杖次があつて、宿泊所にしたという内容です。頼朝は中太田に五、六日間は滞在し、雫石川を渡つたり、岩手山をながめたりしたのでした。写真は中太田字八卦の段差地形です。斜面の高さが約2mあります。段差の上は中太田字八卦と字官台の住宅地です。



宮城県で5月に撮影
撮影：清代 正晴さん

セッコク
茎は細長く、堅く、始めは緑色を帯び、通常は後に黒紫色になる。多数の節があり、節ごとに葉の基部の鞘に包まれる。一年目の茎には節ごとに葉がある。葉は細い楕円形で、厚くややくつやがある。葉は年の終わりに葉鞘との間で脱落する。新しい芽は古い茎の基部から横に顔を出す。また、茎の先の方から新しい芽が伸び、その根元から根を生じる形で新しい個体ができることもある。大きさが十分であれば、葉のなくなった茎は、次の年に花を咲かせる。花は、茎の先端に近い数節から出る。各節からは、短い花茎が出て、そこから数個の花を咲かせる。花は赤紫がかつた白の花弁で、よい香りがする。唇弁以外の五弁は、いずれも同じく大きい大きさの卵状楕円形、先端はややとがる。唇弁は外見は他の花弁と似たような形で、ただし蕊柱との間の奥の方にくぼみが入り込み、短い距を作る。側弁の基部が下側の外でこれにつながっている。花が咲いた後も茎は数年間生き残り、場合によっては大きな株になる。